

琉球大学学術リポジトリ

統合失調症患者を抱える家族の心的トラウマが介護上の困難・負担感およびストレス反応に及ぼす影響

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 哲哉, Miyagi, Tetsuya メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30595

(様式第5-2号)

平成27年 3月3日

琉球大学大学院

保健学研究科後期課程委員会 殿

論文審査委員

主査 氏名 國吉 緑

副査 氏名 宇座美代子

副査 氏名 金城 貴夫



学位（博士）論文審査及び最終試験の終了報告書

学位（博士）の申請に対し、学位論文の審査及び最終試験を終了したので、下記のとおり報告します。

記

申請者	専攻名	氏名 宮城 哲哉	学籍番号 128852B			
指導教員名	與古田 孝夫					
成績評価	学位論文	合格	不合格	最終試験	合格	不合格
論文題目	Psychological trauma among family caregivers of individuals with schizophrenia in relation to their subjective care burden, distress and stress response (統合失調症患者を抱える家族の心的トラウマが介護上の困難・負担感およびストレス反応に及ぼす影響)					
本研究は、統合失調症患者の急性期症状に伴う家族の心的トラウマが介護上の主観的困難・負担感および心理的ストレス反応への影響について検討することを目的とした横断的研究である。単科精神病院において統合失調症と診断された全患者（入院またはデイケア・外来通院中）の家族介護者379名に対し、郵送法による質問紙調査を実施し、調査協力の得られた117名のうちIES-R（心的トラウマ尺度）の回答を満たした78名を分析対象としている。調査項目は、性、年齢、患者との続柄、学歴、経済状態、健康状態、現病歴の有無、急性期症状（暴力、暴言、興奮、意味不明な言動、身の危険を感じた）の経験、IES-R、FBDS（主観的困難・負担感尺度）、SRS-18（心理的ストレス反応尺度）であった。分析は、IES-R得点のカットオフ24/25で低、高の2群に区分し、FBDSおよびSRS-18を従属変数、IES-Rを独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。結果は、群間比較では精神症状として興奮にのみ有意差を認め、IES-RとFBDSとの関連ではFBDS総得点およ						

び下位尺度の「負担」「混乱」で、IES-R と SRS-18 では、下位尺度の「抑うつ・不安」との間で有意な関連がみられた。以上の結果から、統合失調症患者を抱える家族では、患者の急性期症状に伴う心的トラウマが、介護上の困難・負担感や抑うつ・不安などのストレス反応に影響していることが知見として得られ、琉球医学会雑誌第 33 巻 1～3 号に掲載された。精神障害のなかでも統合失調症は慢性化しやすく、社会的偏見やスティグマなど、周囲の積極的な理解や社会的支援が得られにくいなどの特徴から、家族の心理・社会的負担感は大きいことや、患者の急性期症状が家族の心的外傷後ストレス障害（PTSD）の発症や家族の受け入れ意識にも影響することから、本研究知見は、今後の家族支援に対する有効性を認め予備審査では合格とした。その後開催された学位論文資格審査会において既に公表されている掲載論文と類似していることへの意見があり、これを受け保健学研究科後期課程委員会において副論文の作成が本審査への条件として承認された。申請者は本研究の副論文として「統合失調症患者を抱える家族の入退院志向に及ぼす影響要因の検討 Factors affecting the intention of family caregivers of discharge or hospitalization for individuals with schizophrenia」を琉球医学会雑誌へ投稿・受理されたことより本審査へ臨んだ。

本審査では本研究成果を時間内に系統的に説明していたが、審査会では指摘事項として本研究で用いた尺度の意義及び心的トラウマと興奮との関連について明示するよう求めたところ適切な説明がなされたことを確認した。

申請者はこれまでの審査の過程における指摘内容に対して十分に応えており、また、本邦において統合失調症患者家族の心的トラウマに焦点をあてた研究は少ないことから、今後の統合失調症患者家族支援に対し貢献できる有意義な研究であると認められた。今後の課題として、統合失調症患者を抱える家族介入として心的トラウマの契機となる急性期症状に関する心理的教育、その際の患者及び家族自身も含めた対処方法や長期的治療計画の立案、家族会などの患者家族間の連携を語る機会の提供や家族が一時的に休息できる環境調整など、家族の個別性に応じた支援策を具体的に論じており継続的に研究を発展させることが期待される。

以上のことより、本審査会では宮城哲哉君の本論文を学位論文として合格とする。